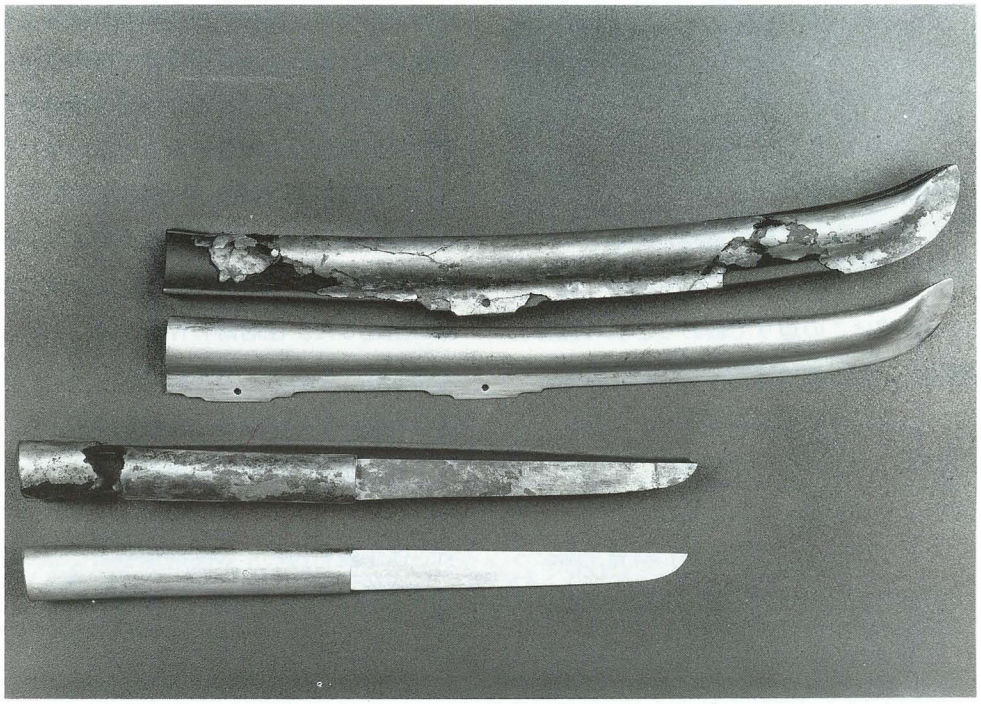
# 木次町平が廻横穴概要報告書



**平が廻横穴出土金銅装刀子**

全長43cm前後の刀子で、鞘も刀身も金銅板で作られたものである。全国ではこの他に４例の金銅装の刀子が出土している。写真は、鞘、刀身共に上段が修理保存処理されたもので、下段はその復元品である。（本文参照。）

**木次町教育委員会**

# 木次町平が廻横穴について

蓮岡法暲

## 1　位置と環境

平が廻横穴は、島根県大原郡木次町大字寺領字平が廻に所在したものであるが、開発工事で発見され、消滅した。位置は木次の市街から久野川沿いの谷間を南東方向に約2.5km進んだ地点にある。

この谷間は、天平5年(733)年勘造の『出雲国風土記』に記載されている大原郡家(木次町里方)から仁多郡家(仁多郡仁多町郡村)に至る「東南道」が通っていた地域であり、古くより奥出雲に通じる幹線道路が開通していたものと考えられる。木次の市街地から続くやや広い谷間はこの辺りで終わり、この先に仁多郡境までは平地はほとんどない。

付近の遺跡をみると(図1)

1)原口古墳（木次町大字寺領原口）

平が廻横穴の南東200mのところにある。長さ約100mの細長い丘陵上に5基の古墳が分布している。昭和44年に調査された1号墳は径11m、高さ2mの円墳で、頭大から40cm位の山石を積み上げており、この地方では類例のない特異なものであることがわかった。

2)桜林遺跡（木次町大字寺領字桜林）

太林寺(住職三輪浩道氏)裏山にあり、昭和48年豪雨の際丘陵斜面が崩壊し、多量の土師器が出土した。住居跡の存在が推定される。

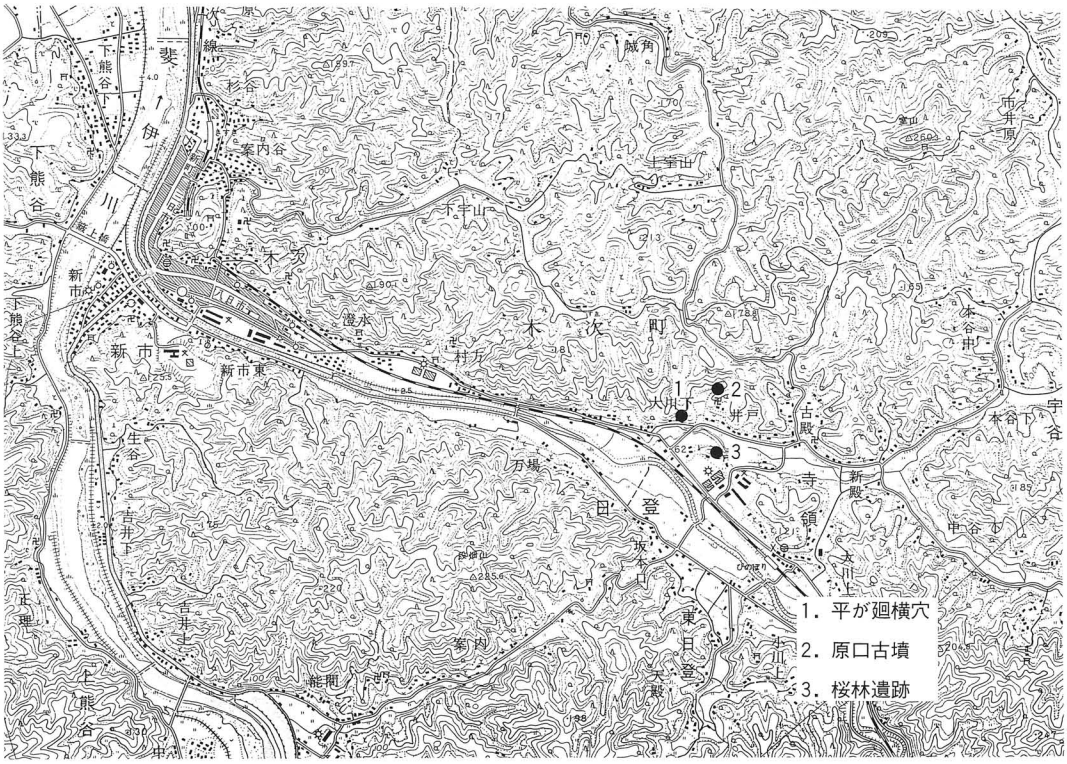



**図1　　平が廻横穴と付近の主な遺跡**

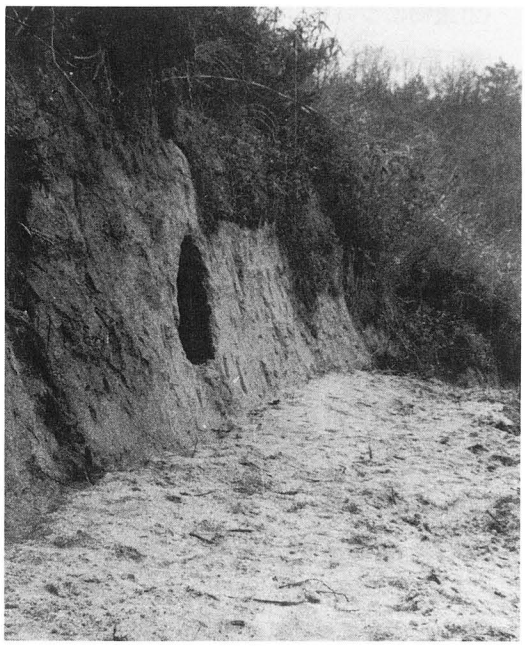
## 2　遺跡の概要

(1)遺構について

この横穴は、昭和32年５月30日、道路拡張工事に際し、丘陵斜面の切取作業中に発掘されたもので、多量の遺物が採取されたが、横穴は消滅した。

発見時の記録(注1)によると、崩れ落ちた土を除去したところ、かなりの数の川石が長方形に配列されていたという。当地方の横穴では、玄室の前後あるいは側辺に配石があることがあり、またお棺などを固定したと推定される石も検出されることがある。このことから川石の認められた範囲、位置が横穴の玄室であったと考えられるが、規模等については明らかではない。ただ、川石の認められた範囲は奥行ほぼ３ｍであったことがわかっている。

横穴の所在した場所は、現在は下方の耕地面から７ｍ位の高さの崖面の中途の位置であるが、下方の耕地が丘陵斜面の切削、切り下げによってできあがっていることから考えると原地形では丘陵斜面の下方の位置であった



**発見直後の平が廻横穴(山本誉富氏提供)**

と思われる。

土質は、いわゆる花崗岩の風化土の真砂で、あまり固くなく、崩れやすい。

(注１)　三輪浩道「ひのぼり古墳考」(大原郡学校協議会・郷土資料調査編集委員会刊『郷土資料（第３集)』昭和32年10月)

**平が廻横穴遠景（矢印部分）(山本清氏提供)**

(2)遺物について

横穴発見時に、次のような多量の遺物が採取されている。

金銅装刀子１、坏３、坏蓋３、高坏８、壷３、堤瓶２、瓿１、坏破片４

ほかに人骨が出土したが、研究機関に寄贈された。

これらについて若干の解説を加えると、

○金銅装刀子（図２）

鞘は金銅板を折り曲げて、反りの強いなぎなた状につくり、刃側の合わせ目中途に吊り下げ用の小孔を設けている。鞘口を欠くが、ほかの例からしてここにも小孔があったことも考えられる。柄も金銅板を丸めてつくり、柄元が鞘の中に入る呑口式になっている。柄頭は平に閉ざされている。先端近くで折損しているが、柄長さ約15cmと考えられる。刀身は銅板製で鍍金されており、全長15.7cmあり、径は5.7cmで、中空の柄の中に挿入され、目釘１個でとめられている。

柄元が約４cm鞘に差し込まれるものとして、推定全長は43cm前後と考えられる。

（注２）　末永雅雄『増補日本上代の武器本文編』（木耳社、昭和56年１２月刊）P231参照。

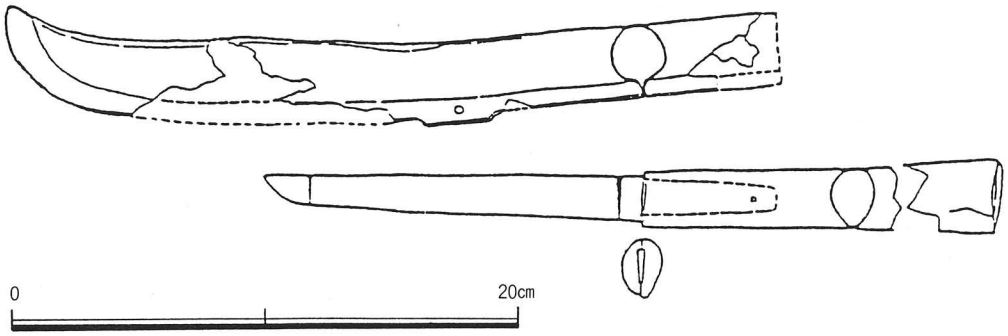



**図２　　平が廻横穴出土　金銅装刀子 実測図**

○坏蓋（図３－１・２）

背面部と口縁部の境の稜は消失するか、または削り出された突線で表現される。また、口縁端は丸くおさめられているものや内面に凹線をめぐらすものがある。これは２段式の端面の形式的な表現かと考えらえる。いずれも背面の整形はヘラ削りの上になでを加えているが粗雑である。

○坏身（図３－３・４）

口縁部立ち上がり、受け部の先端はすべて丸くおさめられており、立ち上がりは強く内傾する。底部は広く削られていて、高さは低い。

○瓿　（図３－５）

瓿は１個である。底部は削りによって平面が作られており、肩がやや張ってたまねぎ形を呈する。頸部はしまって、口縁部はラッパ状に大きく開くものと思われる。頸部２箇所に、２条づつの沈線を入れる。

○広口瓶（図３－６）

底部はヘラ削りによって平底につくられ、口縁は広い直口である。

○高坏（図３－７・８）

高坏は８個ある。坏部は口縁部が強く立つ深いものもあるが、多くが口縁部はほとんど直線的に外上方に開くものである。

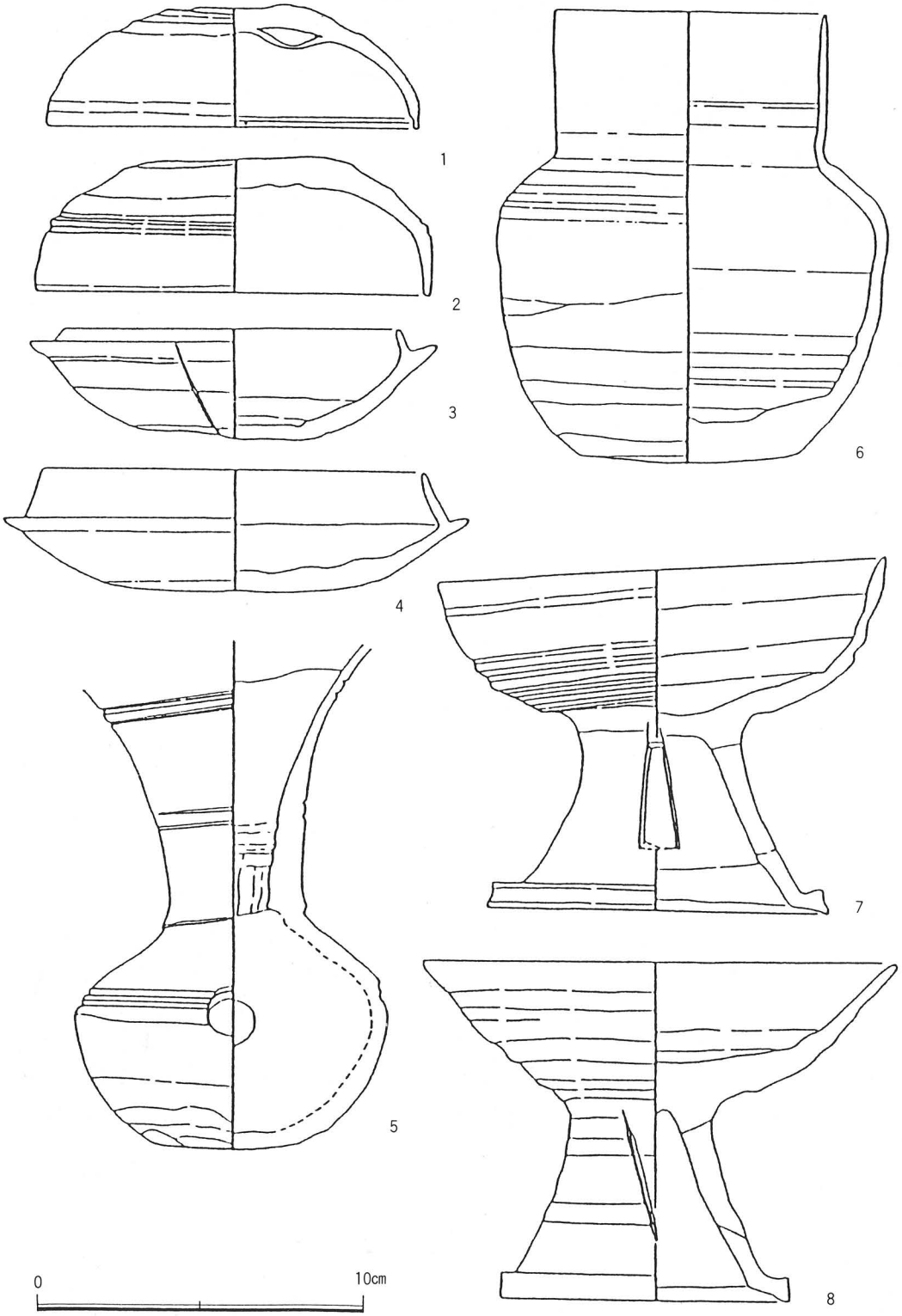



**図 3　　平が廻横穴出土　須恵器 実測図**

平が廻横穴出土　須恵器　（山本清氏提供）

脚はいずれも短く、端部には平面をもつ。透かしは、三角形あるいは台形のものを２方向にあけている。中には条線をいれただけのものもある。

上記出土遺物のうち、須恵器についてみると、山陰地方の古墳時代須恵器の第Ⅳ期に属するもので、この横穴はほぼ７世紀初頭に作られたものと考えられる。

### 3　むすび

横穴については、以上概観したとおり、遺構については残念ながら明らかではないが、遺物からその時期については、ほぼ７世紀初頭と推定でき、また全国に類例の乏しい金銅装刀子を副葬しており、木次町の古代史を考える上で、貴重な資料である。

横穴の所在する久野川沿いの寺領の谷間は、奈良時代に大原郡家から仁多郡家に至る東南道が走っていたことからもわかるように、奥出雲との連絡道として古くから重要な地域であり、仁多郡方面出入の際の関門的な位置を占めていたと考えられ、この横穴の被葬者は７世紀におけるこの地域を支配した有力者の可能性がある。

それにしてもこの横穴の主は、どのようにしてこの金銅装の刀子を入手したのであろうか。現在までのところこれに類する優品は県内はもちろん中国地方にも出土をみていないが、この刀子と関連をもつ遺物の検討、その分布あるいは入手ルートの検討などが急がれるところである。

消滅した平が廻横穴　人物の立つ位置　（山本清氏提供）